主権者は主催者から
　めんどうくささを引き受け、楽しむ
　　つくって食べて、つながって

2025 年 3 月 19 日

静岡県高等学校障害児学校教職員組合　書記長（当時）　　橋本　純

はじめに

ご紹介いただきました橋本純と申します。今は静岡県高等学校障害児学校教職員組合の書記長をやっています。今年の 3 月で終わります。お招き頂きありがとうございます。今日紹介することは新たに書いたわけではなくて、過去に書いたものをまとめて紹介する形になりますが、まるで自叙伝を作っているような気分でした。

「面白く、楽しく」と言い続けて、「ワクワクドキドキ」を合言葉にしてきましたけれど、最近年のせいか体調のせいか、そうも言えない時も多くなりましたが、自分を改めて元気づけるためにもお話ししたいと思います。よろしくお願いします。

「エバーグリーン藤枝」、全国的には「エバーグリーン静岡」と称し、高校生たちと一緒に楽しく活動していることが、いろいろなところから注目されていますのでそれを中心に紹介します。

なぜ始めたのか。理屈はすべて後付けになりますが、根本に戻って、私がなぜ教師になったのか、学校の授業としてどんなことをやってきたのかということを紹介する必要があります。

今の私の生活はどちらかというと、組合活動よりも、高校生を引っ張り出して「子どもと一緒に遊ぼう」と作った「空耳（そらみみ）子ども会」が中心です。今度の日曜日もその行事がありますが、それも含めていろいろな活動をどんな意識で取り組んだらよいのか、再確認ができたらと思います。

いつだって「エバーグリーン」、いつまでも「エバーグリーン」

最初に「エバーグリーン」の活動を紹介します。2003 年から活動開始。「主権者は主催者から」「めんどうくささを引き受け、楽しむ」「つくって食べて、つながって」を合言葉に。教員、市民、高校生、大学生、若者が実行委員会を結成し、これまでに 21 回の写真展・映画会・講演会を行なってきました。

歴史を簡単に振り返ります。2005 年に長倉洋海写真展・講演会、2006 年に高遠菜穂子さん、2007 年に広河隆一さん、2008 年に堤未果さん、2009 年に山本敏晴さん、2010 年に四之宮浩さん、2011 年に足立力也さん、2012 年に豊田直巳さん、2013 年に玉本英子さん、2014 年に伊東英朗さん、2015 年に伊藤めぐみさん、それから 2016 年に「種まきうさぎ（フクシマに向き合う青春）」上映会…。

「平和をつくる旅」として、2009 年に長野の「無言館」、2010 年に京都「立命館大学平和ミュージアム」、2011 年に伊豆市「妙蔵寺」の佐治妙心（麻希）さん、2012 年に東

京夢の島の「第五福竜丸展示館」と「ひとみ座」を訪問、2012 年に「韓国・平和の旅」…。

2013 年、14 年には「平和をつくる旅・核被災に向き合う青年・学生の集い」に参加し、福島の被災地に学び、核被災に関する歴史と、これからを担う若者のあるべき姿について語り合いました。そこで高知県の「幡多高校生ゼミナール」と出会い、刺激を受け、第五福竜丸の元乗組員の方からお話を聴く活動に取り組みます。

当時中学生で原水爆反対署名を始めた杉村征郎さん、第五福竜丸の元乗組員だった故見崎進さん、故池田正穂さん、当時焼津漁港の職員だった北原茂治さん達のお話を高校生と共に聞く会をもちました。

2017 年にジャン・ユンカーマン監督「沖縄うりずんの雨」上映会、2017 年に埼玉の「原爆の図丸木美術館」を見学して秩父ユネスコ協会の若者たちと交流、2018 年に桃井和馬さんの講演会、2019 年に「ICAN」の川崎哲さん、2020 年には焼津の吉田恵美子さんを招き「デンマークから学ぶ－平和のための底力」、2021 年には堀川文夫・貴子夫妻から「福島原発事故から１０年－愛するふるさとのために、私には何ができるのだろうか」、2022 年には佐野陽子さん「満蒙開拓とは何だったのか」、2023 年には市田真理さんから「平和の『語りつぎ部宣言』～第五福竜丸は今も航海中～」のお話を聴きました。

昨年 2024 年は「全国高校生平和集会」を焼津で開催、そのプレ集会として、映画『我が友　原子力』上映会と市田真理さん（第五福竜丸展示館学芸員）と高校生によるビキニ事件当時の手紙などの朗読・トークセッション。

今年２０２５年は、映画『はだしのゲンが見たヒロシマ』上映会、石田優子監督講演会を行いました。

「主権者は主催者から」「めんどうくささを引き受け楽しむ」「作って食べて、つながって」

毎年８月の「藤枝市平和展」では、高校生や若者による「青春の鼓動～平和だからこそ～」を主催者として楽しみながら企画運営しています。当日打ち合わせをして、昼ご飯を自分たちで作って食べて、若者が挨拶をして、司会を高校生が務めます。

２０２４年は、「全国高校生平和集会・焼津」のプレ集会として企画し、オープニングは焼津高校演劇部による「ばらの祈り」を上演し、市田真理さんのお話しを聴き、その後高校生が感想を述べ質問をするトークセッション。後日のまとめの会では、餅つきをして、「愛吉・すずのばら」の孫苗木を移植しました。

「知っておかなければならない過去のできごとがある、解決しなければならない現在の課題がある、それらと向き合わずにどうして未来を語れようか」という形で「エバーグリーン」の活動を行ってきました。

藤枝市平和展　「青春の鼓動　平和だからこそ」

昨年 2024 年の平和展の様子を紹介します。「青春の鼓動」では、高校生たちが平和への

思いを様々な文化的な形で発信しています。午前中は、打ち合わせをして、リハーサル。合間にお昼ご飯 120 人分のカレーライスをみんなで作って食べて、午後から開催。

司会は島田樟誠高校演劇部の生徒たちがつとめました。そこで昨年 3 月に行った「全国高校生平和集会in焼津」（高校生平和ゼミナールの集会）での活動を紹介。彼らはその勢いで広島の「原水爆禁止世界大会」や「全国高校生平和集会・広島」にも参加しました。

島田樟誠高校演劇部
『島田空襲　明日まで続く物語』

オープニングは清流館高校の書道部による大書揮毫。藤枝北高校演劇部と「びわの花朗読の会」による『この子たちの夏 1945・ヒロシマ ナガサキ』の朗読劇。藤枝北高校演劇部は自分たちで作品を作りたいということで、米原万里さんの『バグダッドの靴磨き』という小説を脚本化して、自分たちで朗読劇を創作し演じました。清流館高校福祉部 JRC は、子ども食堂のお手伝いなどの活動紹介。島田樟誠高校演劇部は『島田空襲　明日まで続く物語』。長崎への原爆投下訓練として島田に落とされた模擬原爆、パンプキン爆弾の被災者から当時の先輩の高校生が話を聞き、脚本化。代々引き継いで朗読劇として伝える活動をしています。昨年の平和展では新藤兼人監督の映画『第五福竜丸』を上映し、あらためて「目撃者となる」「当事者となる」思いで鑑賞会を行いました。

2024 年8月 11 日（日）
藤枝市平和展「青春の鼓動」

伝えようとすることの大切さ

過去に書いた文章ですが、2024 年 8 月号クレスコに、『地元の戦争を知って考える高校生たちのとりくみ』として、島田樟誠高校、焼津高校、藤枝北高校、焼津中央高校、榛原高校たちの平和展をやった後の感想を紹介しました。どんな気持ちだったのかということがとても伝わってきます。爆弾の被災者はそんな気持ちだったんだということが、朗読劇を通じて人に伝えようとすることで、改めて見えてくる。文字を読むだけではなく、言葉に出して伝えようとすることで、深く分かってくることがあるのだなと思います。高校生たちは、学んだことを人に伝えようとすることで「自分事」にしているようです。これが大事だと思います。学校の学びがなぜ楽しく面白くないのかというと、学んで自分の頭に入れて、テストの結果に現れればよい、で終わっている。伝えよう共有しようとすることで理解が深まるのに、それが学校の教育であまりできていないということが一番の問題だと思います。

『平和のための底力「変えることができる」と思うことによって得られる自由』

昨年のエバーグリーンの企画で招いた第五福竜丸展示館の学芸員・市田真理さんは、「語り継ぎ部宣言」という言葉を使いました。人に伝えようとすることがその人自身を変えていく。より良く変えることができる、変えたいと思うから伝えようとする。伝えようとすることと希望を持つことはつながっているように思います。

大石又七さんも、子どもに質問されて、伝えようと思って語るようになっていく。自分のような思いをする人を出してはいけないという形で変えようとする、その希望を持つことが大事だと思います。

しかし、もう一方で自省・自制と共に注意しておかなければいけないことは、変えることができる、変えたいという希望を持てないと、誰かのせいにして責任を転嫁し、ただ不平不満をぶつけ非難するだけで、人頼みになってしまいます。そうではなく、自分には何ができるのかを考える。伝えようとすることは変えようとすること、変えようとしたときに自分には何ができるのか考えることになる。その問いは、人任せ・行政任せにするのではなく、世の中をより良くするための自分の責任を自覚するきっかけになっていく、そういう経過をたどっていくと思います。

目的を手段にしてはならない

楽しく喜びを持って生きるためには、本来遊ぶことはもちろんだけれど、学ぶことも働くことも楽しく喜びであったはず。ところが競争に勝つことや利益を得る手段になってしまっている。やりたくないけれど、がまんして、耐えて、無理して、ということが要請されてしまっています。本来なら楽しくて面白ければ、喜んで努力し、苦労でさえも喜びになるのに、そういう形に繋がっていない。「学ぶことは楽しいという姿を見せることが教師の役割」であったはず。学校での学びのあり方が改めて問われていると思います。

他者を蔑む言葉が多くなっている気がします。競争と選別で差別に駆り立て、報われないのは自分の頑張りが足りなかった自己責任だと思わせる文化の中だからでしょう。そのせいで、苦しんでいる人たちに無関心になってしまう。そんな社会ではなく、「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」社会、楽しくおもしろがって自分の能力を高め、それを自分のためだけでなく世界をより良くするために使うことに喜びを感じる世界にしたいものです。「生きているだけでいい」「あなたが、そこにいてくれるだけでうれしい」とお互いに言いあえる社会にしたいものです。

世界はそう簡単には変わりませんが、自分の身の回りには目指す社会はできるはず。だから、「主権者は主催者から」「めんどうくささを引き受け楽しむ」「作って食べてつながって」を合言葉にしているわけです。

おもしろくて楽しいから一緒にやろう

2008 年「子ども白書」用原稿ですが、私自身が高校の現場にいた時に、どういうつもりで高校生を外に出したかったのかということについて振り返っておきたいと思います。

１、「授業とは、教師と生徒で行う共同の文化創造の営みである」

大学時代に出会ったこの言葉、それに倣って、というわけではなく、やりたいようにやってきたことを振り返るとこういうことだったのかと気づきました。一方的に教えるのではなく、一緒に文化を作っていく。いろいろな授業をやってきました。地理の授業では、「世界の食文化研究」と称して班ごとに様々な国の料理づくり。郷土史の授業では、地域の史跡巡りをして他の先生を招いて発表会。勾玉づくりやわら草履づくり。火打石や舞ぎり式で火起こしをして、せっかく火を起こしたのだからとバーベキュー。ＨＲの活動でも、竹を割って流しうどん、もちつき、ふと巻きずしづくり、沖縄料理など「つくって食べて」ということをやってきました。

２、「教室は世界に開かれた窓」

そもそも学びとは社会をより暮らしやすくするためのもののはず。生徒と一緒に活動し、調べ学習、発表、討論を中心とした授業をしてきました。生徒が自分の問題意識で現実と向き合い、学んだことを他者に伝え、働きかけ、反応から再び学びなおすことができます。

また、活動の中から学ぶ必要性が生まれてくる。私が学校で授業をするのは「地域で活動する高校生」を育てることと「地域活動の拠点としての学校」作りのため、と思うことができました。

３、地域活動の拠点としての学校づくり

「福祉学習」や「総合的な学習の時間」でもいろいろなことができました。私が担当したのは、「地域福祉実践」と称して、学校周辺の保育園・幼稚園、お年寄りの施設、障がい者の作業所、障がい児施設を訪問、子ども、お年寄り、障害のある人たちと一緒に遊んだり、交流したりする講座でした。ガイダンスのときに、わたしは生徒に向けて次のように訴えました。

〇一生懸命にやらないとおもしろくない。手がかかり、めんどうくさいことが楽しい。
〇お客さんではなく、主催者になる方が手ごたえがあり、やりがいがある。
〇楽しませてもらうより、人を楽しませる楽しさに気づこう。
〇社会や地域は高校生を必要としている。出番はたくさんある。
〇学校内にとどまらず、地域への発表・発信・提案を目的とした活動に喜びがある。
〇先生や人に頼らず、自分で考え、失敗を恐れず、へこたれず、粘り強くとりくもう。
　きっと自分に自信を持てるようになるから。
〇地域の素敵なおとなと出会い、一緒に活動する仲間にはいろう。

「楽しくて面白いから一緒にやろうよ」という形で呼びかけることが合言葉になっていたような気がします。

４、高校生を地域に引きずり出す

「きみを必要としている人がいる」とボランティア活動の窓口をしてきましたが、その

ためには受け入れ先が必要です。教師自身が学校だけでなく、地域・社会の生活に関わる活動に開かれていなければ生徒を誘えない。「空耳子ども会」と「エバーグリーン」を始めたのはその一環だったのだと思います。

５、めんどうくささをひきうけ、楽しむ

他人まかせがファシズムを生む。自分がお客さんになっていて誰かがやってくれるのを待っている方が楽ちんという姿勢が、政治においてはファシズムにつながります。自分が主催者側になって、あれこれ気を使い、どう作っていくかに関わることは、とても手がかかってめんどうくさい。しかしそのめんどうくささを引き受けて、楽しむ力がなければ、主権者にはなれない。だから、主催者になってめんどうくささを引き受け、面白く楽しく一緒にやって、その力を主権者となるために生かそう。

高校生と共に作る学びの場、学校、地域

2015 年の「全国教育のつどい」に、『「ひらかれた教育のつどい」への試み～豊かな育ちと学びのために学校と地域にできること～』と題するレポートを報告しました。

「エバーグリーン」はそもそも教師の教育研究活動から始まりました。しかし、「教師だけの仲間内で集まって良しとする教研でよいのか」という疑問があり、それで刺激されて「ひらかれた教研」「ひらかれた学びの場」を模索しました。そもそも学びの場の当事者である生徒がこの場にいなくてよいのか。教育研究活動それ自体が、技術や知識を学ぶ場であるだけではなく、伝え・働きかけ、共に学校や地域を変える力を持つ場でなければいけないのではないか。そんな議論から、高校生にも加わってもらって、一緒に地域で活動を作ろうと「エバーグリーン」が始まってきたわけです。

遊びは学び

次に「空耳子ども会」について紹介します。『高校生や若者を地域に引っ張り出そう』2005 年頃の原稿です。

私は大学時代にセツルメントに所属し、大学生が地域に出かけて行って、子どもたちと遊んだり、生活相談にのったり、法律相談したりという活動に参加しました。子どもと関わっているのは楽しい、地域に子ども会が必要だと強く思い、法律家をめざしていたのをパッとやめて、教師になると決意をして、東京の中学校の教師から始めました。その時も授業だけでなく、生徒を外に連れ出し、わが子も含めていろいろ遊びました。

正式に子ども会を始めたのは藤枝に引っ越してきてから。我が子の PTA 役員で地域の子ども会担当をやる機会があり、PTA 会長の所有する農地を使わせてもらって始めました。子どもたちが集まるなら、ここに遊び相手に高校生がいたら子どもも喜ぶし、高校生にとっても有意義で貴重な体験になると思って「空耳子ども会」を始めました。

高校生が卒業して静岡大学でサークルを作ると言ってつけた名前が「空耳子ども会」でした。「空にも耳があるんだ。きみのつぶやきも、きっとだれかが聞いていてくれるよ」と

いう詩を作って曲までつけて。その詩をもとに「空耳子ども会」としました。

「空耳子ども会」に高校生を連れてくるために高校の教師を続けていたように思います。なぜ私が勉強してきたのか、なぜ私が教師になったのか、それはこの「空耳子ども会」を始めるためだったのかもしれないと思いました。

「空耳子ども会」では、水道も電気も何もないところで、小川でサワガニやウグイの稚魚をとったり、自然の中で遊び、麦、そば、芋を栽培・収穫してその場で調理します。収穫した小麦を混ぜてうどん打ち、竹を切って割って流しうどん。そばうちやピザ生地からつくってレンガつくりの石窯で焼く。羊の腸からソーセージを作ったり、味噌作りをしたりしています。春はたけのこ掘って、竹の子料理。

ある高校生が「子どものためというより、橋本が子どもで遊んでいる」とつぶやきましたが、その通りだと思います。

おわりに

いろいろな意味で自分自身も恵まれていたのだろうと思います。学校での「勉強」と言うよりも学びが楽しかったです。子どもの頃にやったコマ回しとかメンコとか、いろいろな遊びの延長で学校での学びに取り組めました。中学校、高校時代の受験勉強も苦でもなく、面白かったし、夢中になっちゃいました。いろいろ新しいこと、わからないことがいっぱい出てきて、それにもワクワクドキドキできました。そういう経験ができたのも恵まれていたからだと思います。今の学校の教育では、辛いことを我慢して努力することが大事だということが強調されすぎている気がしますけれど、それでいいのかなと思います。改めて楽しいということを尊重しなければいけない。

そもそも学ぶことは、働くことも、人間にとっては楽しく喜びのはず。その「目的」を「手段」にしてはならない。「学ぶことは楽しいという姿を見せることが教師の役割」。学ぶことそれ自体が楽しいものということを重視しなくてはいけないと思います。

私が面白がってやっていると、同僚の中には「あんたみたいに自分で面白がって楽しそうにやれる人はいいよな。俺ら好きでやってるわけじゃないから勘弁してよ」という声は何人もから聞きました。気の毒だなと思いましたが、競争社会・自己責任論の強化と教師の多忙がそれを言わせているのだと思いますし、より一層、そういうことを言わせてしまう学校になっているかと思います。

「余暇の反対は仕事ではなく、怠惰である。多忙とは怠惰のことである。」「ちゃんと遊ばないと、きちんと学べない」仕事も活動も。

それをなんとか変えていく力を教職員合も持っていないといけないと思うので、任務だから仕方なく我慢してやるという意識ではなく、面白くてワクワクドキドキ、遊び心を失

わずに継続するような組合活動にしたいと思ってきました。

以上